

佳作

祖父の大きな手

熊本県熊本市立出水中学校二年 川畑 小百合

私の祖父の手は、とても大きな手です。しわが沢山あって日に焼けて真っ黒。いつも祖父はその大きな手で、趣味の畑仕事をしています。そんな祖父は今年の五月六日に、「古希」を迎えました。古希とは七十歳のことだそうです。古希のお祝いに祖父に何をあげようかと母たちと話し合った結果、私と姉で色紙をプレゼントすることになりました。姉は「延寿万歳」で私は「寿楽」と書くことに決めました。この二つの言葉はいつまでも祖父が元気で長生きできますようにという願いがこめられた言葉だそうです。高校生の姉が所属している書道部の先生に祖父の古希のことを話して、その先生に教えていただいた言葉だそうです。習字が苦手な私は、空いた時間に姉に習いながら、一生懸命練習に励みました。最初はなかなかうまく書けず、お手本とにらめっここの状態でした。時々くじけそうになりながらも、大好きな祖父のために練習を頑張りました。その甲斐あってか、少しずつですが、うまく書けるようになっていきました。そして、姉とドキドキしながら用意していた色紙に清書することになりました。心をこめて一生懸命書きました。書き終わったあとには、じわじわと達成感がわいてきました。祖父が喜んでくれるといいなあと思いました。

数日後、祖母と母と叔母の三人の手料理を囲んで、祖父の誕生会をしました。食事をする前に姉と私から、その色紙をプレゼントしました。祖父は、「ほほう、上手に書けたねえ。ありがとう。」と私達を褒めてくれました。その時、祖父の目が涙で光っているのが見えました。本当に祖父は嬉しそうでした。そんな祖父を見たとき一生懸命頑張って、良かったなあと思いました。



私は小さい頃から祖父にいろいろな事を教えてもらってきました。大好きな祖父の大きな手は、これからもずっと盆栽の手入れをしたり、畑の野菜を愛情いっぱい育てて、私達家族をあたたかくつつみ込んでくれると思います。私にとつて優しい目につこり笑っていつもそばで見守ってくれている祖父母がとても大切な存在です。両親はそんな祖父母をととても大事にしています。だから祖父母も私達を大事にしてくれます。そんな祖父のしわいっぱいの手に、これからも楽しい思い出のしわがたくさん刻まれていくのを私はそばで見たいと思います。